

よ持て来い、向ふの、おばさん、ちよいとお出、お芋の煮ころがし、お茶あがれ、後で、おならは、御免だよ。

羽子

おほらうり、お羽子、御羽は十三、九ツ、十、澤ア邊、

金成、若柳、若くて、はねるは白兔

七夕

今年豊年萬作で、櫛で計らなえで、箕で計つた…

若い衆、たのみませう、まわりはね、おちよ子さん、

あれ見らせ。これみらせ。

螢狩

一、螢さん、おいとしや、夜は、ぼんぼり高提燈、晝

は草葉の露の蔭。

二、螢さん、山見て来い、行燈の光を、ちよいと見て

来い。

三、螢さん水飲め、彼方の水は苦いぞ、此方の水は甘

研究 盛岡地方の手毬歌お手玉歌 駿河地方の子守歌に就て

いぞ、なんぼんばたけの螢

鬼遊

れいれえれッば、かさうり雀、あぶらひき鳥子、つゆのめちりん。(ついで)

駿河地方の子守歌に就て

駿河國大宮町 加藤伊砂吉

余は我國の子守歌の多くを見て、我國幼兒保育の主、義が子守歌に依りて、明かに窺ひ知らるべしと信ずるものなり今左に大宮町附近の子守歌二三を擧げん。

其 一

「ねんねんよー。ねんねんよ。ねんねの子守は、何處往った。山を越して。郷いッた。郷の土産に何貰った。でんでん太鼓に笙の笛」

其 二

「ねんねんしなされ。ねんねんよ。泣くと長持脊負せ  
るぞ。起きると興津へくれてやる。寐いると根方(山の  
根方)さて山家のへくれてやる。こんな良い子を誰かマツた。  
誰もかまはぬ一人泣。一人で泣くのに仕様がない。」

其 三

「ねんねんよ。ねんねんよ。ねんねの子守は。何處  
いた。神田の町へ。帯買いに。帯は何帯小倉帯。く  
けておくれよ妻女さん。くけてやるのは易けれど。  
此の子に泣かれてくけられぬ。明日雨降り川が出る。  
此の子を流してくけてやる。」

讀者は右第二第三の如き歌を見て、如何に思ひ給ふ  
や、初は賺す、次に驚嚇、次に放擲、何たる無慈悲ぞ  
や。

而し近年或新聞紙に見へたりとて左の如き歌を唱ふ  
者も多し

「坊やが大きく成つたらば。宅で作りし馬に乗り。海山  
越えて里こえて。劍の林も切抜けて。彈丸の霞も顧  
みず。金鵝勳章胸に掛け。おぢいさんと。おはあさ  
んに見せたいな。」

何と其れ面白からずや幼児には理解するや否とを問は  
ず、そを唱ふ子守の心を耕すこと多きはあきらかななり。  
左に江戸の子守歌二三を擧げん讀者諸君の御熟讀を  
乞ふ

其、一(母の歌ひし如きもの)

「坊やはいい子だ。ねんねしな。坊やの可愛さ限りな  
し。天に例へた星の數。七里が濱では砂の數。坊や  
はい子だ。ねんねしな。」

其、二(乳母……)

「坊ちゃんはい子だ。ねんねしな。明朝は早く御目  
覺めよ。お乳汁の出初を。たんどあげよ。坊ちゃん

はよい子だ。ねんねしな。

其三(生母乳母共通)

「坊ちゃんはいー子だ。ねんねしな。ねんねこあんこ  
ろ餅幾代餅。助總銅羅燒。米饅頭。坊ちゃんはいー  
子だ。ねんねしな。」

(終り)

## 小兒の言行

芙蓉

或人が移轉をするどて、家を探して居る話をして、  
三田の方に、庭も廣くて、大層よい家が御座いました  
から、早速問合せますと、彼方、否な事には、楡首が  
有つたのだそで御座いましてね。といふを、少さき  
妹の小耳に挟んで、姉ちやん鞆鞆があれば乗つて遊ぶ  
のにいゝのにねー。なせだろうねー。

姪の五つゝになれるが、叔母様の名は、祖母様の名

研究 小兒の言行

は、と次第に問ひて、最後に、祖父様の御名は三次と、よ  
く覺へたりしが、暫して祖父の入來られしを見て、祖  
父様、私祖父様の名を知つて居てよ。といふ何といふ  
て見よ。と云はるれば、あの一時計さ。  
是も、同年程の男の子に、繪解をして、汝に出て汝  
に反る。と云を教へしが、數時間の後に、前の詞を覺  
へて居るや。と問へば、暫く考へて、幾時に出て幾時  
に歸る。と答へぬ。

茲年三歳になりし女の子に、お前の生れた日は何日。  
と問ひしに、何と思つてか、オギャ〜といひぬ。  
或男子下女に負はれて、縁日に行き、賣卜者の人立  
せるを見て、買つておくれよ。買つておくれよ。とせ  
がむ。でもあれは、賣卜ですもの。といへば買らない  
なら只見て行かうよ。

第十歳の時兄妻を迎へぬ。或折母は、お前は小舅な